

# 事後評価報告書 事例集

2023年度採択事業向け



**JANPIA**

一般財団法人 日本民間公益活動連携機構

本資料は、2021年度事業の事後評価報告書を中心に、資金分配団体が事後評価の作成にあたり工夫された事例を紹介するものです。これから事後評価に取り組まれる資金分配団体の皆様が、事後評価について具体的なイメージを持ち、検討を進める際の参考としていただくことを目的に作成しています。

資金分配団体の自己評価では、実行団体による成果だけでなく、資金分配団体自身の活動も含め、「包括的支援プログラム」全体を総合的に評価することが期待されております。複数の実行団体を束ね、伴走支援や組織基盤強化といった要素も含めて評価する点には、通常の事業評価にはない難しさがあると考えられます。

本資料では主に資金分配団体の事例を紹介していますが、実行団体の事例も一部紹介しています(p20、21)。実行団体の自己評価では、成果の達成状況や事業実施の妥当性を実績に基づいて検証し、現場からの知見教訓等を抽出することにより、分野全般の質の向上や、本制度の一層の改善につなげることが期待されております。

**本資料は、事後評価の「正解」や「完成形」を示すものではありません。**各団体の状況や事業特性に応じて事後評価を検討する際の参考として、**実際の取組みや工夫の一部を共有するものです。**

事後評価における創意工夫がさらに広がり、民間公益活動の成果や知見教訓が、社会課題の解決に取り組む多様な関係者に益々広く活用されていくことを願っております。

お気づきの点やご意見がございましたら、ぜひJANPIAまでご連絡ください。

# 構成の工夫例 ～一般社団法人SINKa～ (SB第3世代による九州位置(地域)価値創造事業)

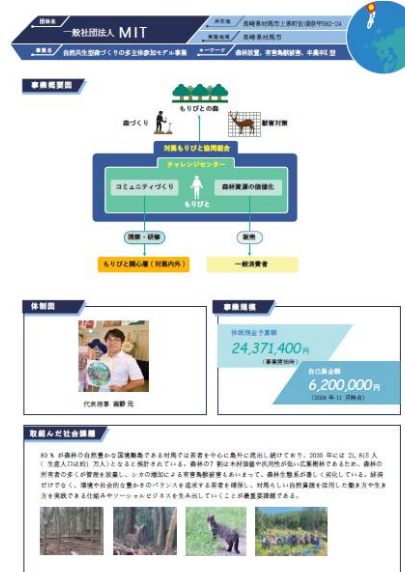
## 目次

- 1 目次 報告書趣旨
- 2 休眠預金事業とは SINKa 団体紹介
- 3 SINKaが公募した休眠預金事業の概要
- 4 SINKa(資金分配団体)ロジックモデル
- 5 一般社団法人 MIT
- 9 大牟田ピンテージのまち株式会社
- 13 Flip the mint
- 17 株式会社イノP
- 21 一般社団法人 E-Yoron
- 25 事後評価実施概要
- 26 包括的支援プログラムの実績 (インプット)
- 27 包括的支援プログラムの実績 (活動とアウトプットの実績)
- 28 包括的支援プログラムの実績 (アウトプットの実績)
- 29 アウトプットの実績: 外部との連携の実績
- 30 アウトカムの分析 (アウトカムの達成度)
- 31 アウトカムの分析 (事前評価時の短期アウトカム)
- 32 アウトカムの分析 (アウトカム達成度についての評価)
- 33 出口戦略・事業の持続化に向けた戦略の成果
- 34 成功要因・課題  
包括的支援プログラム社会的インパクト評価の構成要素別自己評価
- 35 本事業で取り扱った活動を発展させるための提言 事業からの学び・知見・教訓

### 全体概要

### 実行団体ごとの概要と評価

### 資金分配団体事業の評価



**中観アウトカム**  
森林生態系の保全、若葉による森林サービス産業の創出  
地域において森林資源がアンパシビリティを構築する材料もりびとが生まれ、材木の需要の増加・安定化が図られ、アンパシビリティによって得られる収益が増えることで、新しい働き方(農業)による雇用創出が生まれ、地域経済が成長する。また、収益が伸びた森林経営者は、材木もりびとより、協会や学校、持続可能な開発目標、村営型地産地消型森林生態系サービス向上による地域活性化の推進から収益の拡大を享受できる。

**短観アウトカム**

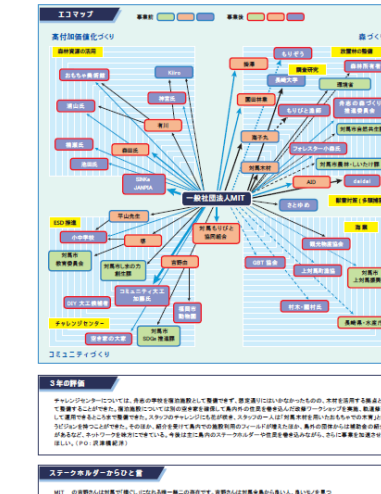
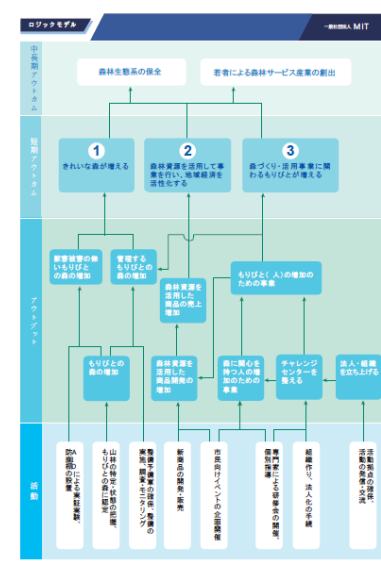
①アウトカム	②アウトカム
① 森林生態系を保全し、森林資源を回復して事業を行い、地域経済を活性化	② 森林資源を活用して事業を行い、地域経済を活性化
③ 森林資源を回復し、森林資源の増加	④ 森林資源を活用した事業の売上増加
⑤ 森林資源を回復し、森林資源の増加	⑥ 森林資源を活用した事業の売上増加
⑦ 森林資源を回復し、森林資源の増加	⑧ 森林資源を活用した事業の売上増加
⑨ 森林資源を回復し、森林資源の増加	⑩ 森林資源を活用した事業の売上増加
⑪ 森林資源を回復し、森林資源の増加	⑫ 森林資源を活用した事業の売上増加
⑬ 森林資源を回復し、森林資源の増加	⑭ 森林資源を活用した事業の売上増加
⑮ 森林資源を回復し、森林資源の増加	⑯ 森林資源を活用した事業の売上増加
⑰ 森林資源を回復し、森林資源の増加	⑱ 森林資源を活用した事業の売上増加
⑲ 森林資源を回復し、森林資源の増加	⑳ 森林資源を活用した事業の売上増加
㉑ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㉒ 森林資源を活用した事業の売上増加
㉓ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㉔ 森林資源を活用した事業の売上増加
㉕ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㉖ 森林資源を活用した事業の売上増加
㉗ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㉘ 森林資源を活用した事業の売上増加
㉙ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㉚ 森林資源を活用した事業の売上増加
㉛ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㉜ 森林資源を活用した事業の売上増加
㉝ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㉞ 森林資源を活用した事業の売上増加
㉟ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㊱ 森林資源を活用した事業の売上増加
㊲ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㊳ 森林資源を活用した事業の売上増加
㊴ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㊵ 森林資源を活用した事業の売上増加
㊶ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㊷ 森林資源を活用した事業の売上増加
㊸ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㊹ 森林資源を活用した事業の売上増加
㊺ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㊻ 森林資源を活用した事業の売上増加
㊼ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㊽ 森林資源を活用した事業の売上増加
㊾ 森林資源を回復し、森林資源の増加	㊿ 森林資源を活用した事業の売上増加

**成果評価**

① リーダー人材との連携  
様々な団体と連携して事業を行ったが、その中の団体のリーダー一人一人と上手く連携することができ、事業は安定し、事業が持続的に進められた。事業が安定した結果、事業が持続的に進められた。事業が安定した結果、事業が持続的に進められた。

② イラストを使ったデザイン制作  
もりびとの活動に際しては、イラストを使ったデザイン制作を行った。その結果、もりびとの活動が地域内外の人々に認知された。それにより、新しい働き方が生まれ、事業が持続的に進められた。デザイン制作は、もりびとの活動の重要な要素となっており、もりびとの活動の持続化に貢献していると考えられる。

③ 法人格を取得した  
一般社団法人としての法人格を取得し、事業が持続的に進められた。事業が安定した結果、事業が持続的に進められた。事業が安定した結果、事業が持続的に進められた。



実行団体事業毎に4ページにわたり、ロジックモデル、指標達成状況、成功要因・課題、エコマップ等を紹介。事業担当POによる「3年の評価」や「ステークホルダーからの一言」を掲載しています

## 目次

事業概要 事後評価の実施概要	第1章 基本情報	p.5~
課題認識・課題解決の ための手法・事業全体 像・事後評価	第2章 計画概要	p.9~
	第3章 インプットの実績	p.24~
	第4章 アウトプットの実績	
	第5章 アウトカムの実績	
実行団体の評価結果概 要	第6章 実行団体のアウトプット実績	実行団体の評価結果については、「詳細は実行団体の報告書を参照」と記載し、実行団体が設定した指標を全て掲載するのではなく、全体としてどのような傾向があるかを分類し、俯瞰的に分析した内容を掲載しています
	第7章 実行団体のアウトカム実績	
総括	第8章 結論	各実行団体の現場の変化（ミクロ）、活動対象地域の変化（メゾ）、日本全国へ起こしたい変化（マクロ）で整理し、それぞれのレベルでの事業価値を考察、伴走支援の価値・要諦についても考察しています
	第9章 提言・知見・教訓	

# 構成の工夫 ～公益財団法人パブリックリソース財団～ (子どもシェルター新設事業)



事業概要  
事後評価実施概要

活動実績

事後評価結果

提言

目次

- 1. 報告書要約・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 2. 基本情報・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 3. 包括的支援プログラムの計画概要・・・・・・・・・・ 6
- 4. 事後評価実施概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 5. 包括的支援プログラムの実績・・・・・・・・・・ 12
  - 5-1. インプット
  - 5-2. 活動とアウトプットの実績（資金的支援）
  - 5-3. 活動とアウトプットの実績（非資金的支援）
  - 5-4. 外部との連携の実績
- 6. 事後評価結果
  - 6-1-1. アウトカムの達成度合い（資金的支援）・・・・・・・・ 29
  - 6-1-2. アウトカムの達成度合い（非資金的支援）・・・・・・・・ 39
  - 6-1-3. 想定していなかったアウトカム（波及効果）・・・・・・・・ 47
  - 6-2. 新設子どもシェルターから得た学び・・・・・・・・ 49
  - 6-3. 事業設計の妥当性・・・・・・・・ 55
  - 6-4. 子どもシェルターの持続可能性の検証①・・・・・・・・ 58
  - 6-5. 子どもシェルターの持続可能性の検証②・・・・・・・・ 60
  - 6-6. 出口戦略・事業の持続化に向けた戦略の成果・・・・・・・・ 63
  - 6-7. 事業の効率性・・・・・・・・ 65
- 7. 結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
- 8. 提言・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
  - 8-1. 新規子どもシェルターの開設候補団体
  - 8-2. 子どもシェルター全国ネットワーク加盟団体
  - 8-3. 子どもシェルター全国ネットワーク会議
  - 8-4. 日本政府・行政
- 9. 資料（別添）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71

「事後評価実施概要」として、目的・活用目的・評価設問・実施体制・調査方法・スケジュールを3ページで簡潔に説明しています

事後評価結果は、評価設問ごとに、評価結果を報告しています

実行団体への提言の他、新規子どもシェルター開設候補団体、子どもシェルター全国ネットワーク加盟団体、子どもシェルター全国ネットワーク会議、日本政府・行政への提言も作成しています

実行団体のケーススタディやアンケート結果、ガイドライン、意見書等を添付しています

(出所：「子どもシェルター新設事業 事後評価報告書」公益財団法人パブリックリソース財団（2021年度採択事業）)

# 構成の工夫 ～一般財団法人社会変革推進財団～ (地域インパクトファンド設立・運営支援事業)



## はじめに

### 地域課題解決のための共鳴の輪が広がる

このたび発行します「休眠預金事業インパクトレポート2024」は、一般財団法人社会変革推進財団(SIIF)が実施する休眠預金事業のインパクト測定・マネジメント(IMM)レポートとして、2021年度に採択した2つの支援先団体「地域インパクトファンド設立・運営支援事業」に関する3年間の成果をまとめたものです。

各実行団体が取り組む社会課題や社会的背景を明示し、ロジックモデルを活用して、環境・社会を含む事業の提供価値を整理・分析するとともに、本事業を通じた社会課題解決の戦略における初期的な成果(アウトカム)を最終評価として掲載しています。加えて、SIIFと各実行団体の3年間の協働のプロセスを振り返り、数字で見る変化や成果に関する総括を行いました。

本レポートは、一般財団法人日本民間公益活動連携機構(JANPIA)が資金分配団体に求めている事業評価報告書としての位置付けにとどまらず、地域の社会課題を解決している実践者やIMMに携わるさまざまなステークホルダーの皆さまのお役に立てるよう、成果だけではなく、さまざまな教訓や学びの可視化を試みています。

より多くの皆さまに関心を持っていただくきっかけとなり、地域課題解決のための共鳴の輪が広がる一助となれば幸いです。

#### 目次

- 2 休眠預金事業とは
- 3 2021年度「地域インパクトファンド設立・運営支援事業」ハイライト
- 5 休眠預金事業成果報告会  
パネルディスカッション「地域課題を解決するインパクトファンドの挑戦」
- 9 インタビュー  
地域に根ざした課題解決のために

#### 地域インパクトファンド設立・運営支援事業2021～2024 2021年度 SIIF 休眠預金事業の概要と最終評価

- 13 2021年度 SIIF 休眠預金事業の概要
- 15 事業の実績
- 18 初期アウトカムの達成状況
- 19 3年間の振り返り
- 20 地域インパクトファンドの立ち上げ、運営の再現性を高めるために
- 22 インパクトファンドを発展させるために

#### 実行団体の事業概要と最終評価

- 23 株式会社 キャピタルメディカ・ベンチャーズ
- 29 株式会社 うむきんラボ

- 35 事後評価実施概要について
- 36 SIIFについて / 編集後記

「ハイライト」として、社会課題の捉え方、取り組み、直面した課題や事業意義を、実行団体と資金分配団体の声として紹介しています

事業総括・関係者のディスカッション・インタビュー

資金分配団体事業の評価

実行団体ごとの概要と評価

## はじめに

本冊子は、「地域インパクトファンド設立・運営支援事業」において、2021年度に採択された2つの実行団体による3年間の実践から得られた知見を、実務家の皆さまに向けて再現性のあるかたちで整理・共有することを目的としています。

地域におけるインパクト投資の推進に関心を持つ金融機関、行政、民間企業、中間支援組織の方々にとって、「どのように地域インパクトファンドを立ち上げ、運営し、持続可能な仕組みに育てていくか」という問いは、今後ますます重要になっていきます。本冊子では、実行団体の取り組みを通じて見えてきた具体的なプロセス、必要な体制・機能、乗り越えるべき課題や実務上の工夫などを、可能な限り実践的にまとめました。

地域の課題解決と資金循環を同時に実現するファンドづくりには、理論と実務の両面が不可欠です。本冊子が、地域インパクトファンドの立ち上げを目指す実務家の方々にとって、実行可能性を高める一助となり、地域に根ざした投資の輪がさらに広がるきっかけとなれば幸いです。

#### 目次

- 2 地域インパクトファンドとは
- 3 地域インパクトファンドを企画する際の視点
- 5 地域インパクトファンドに求められる組織的な能力
- 8 SIIF「地域インパクトファンド組成・運営支援事業」の成功要因・課題を振り返る
- 9 本事業で取り組んだ活動を発展させるための提言

事業実践からの学びを、再現性のある知見教訓にまとめた内容として別冊で紹介しています

# 「報告書要約」の事例 ～認定NPO法人カタリバ～ (地方における10代の居場所づくり支援事業)

## 報告書要約

- 10代はコミュニケーション不足やつながり不足に陥り、孤立しやすいが、社会にはそうした10代やその支え手をサポートする機能が足りていない。特に地方部では、都市と比較して10代と関わるプレイヤーが限られ、学校外での学びの接続機会が相対的に乏しい。こうした地方部における教育格差にアプローチする上でも、各地に担い手が必須が必要である。地方での10代の居場所事業立ち上げは非常に難しいため、教育支援・経営の観点から基盤構築を支援することに取り組んだ。
- 目指すアウトカムは、10代のための居場所を軸とした活動を行う団体のルーブリックを「教育支援」「経営」の観点で作成し、一定の品質の活動を地域で持続的に実施する兆しが見える段階(Lv.3)に到達すること、その過程や結果として受益者に変化が起きることとした。その上で、ルーブリックの各項目に対応する支援内容をアウトプットとして設定した。
- 3年間の活動の結果、設定したKPIのほとんどを達成することができた。一方で、今後はカタリバやコースセンター起業塾という枠組みだからこそできる外部への価値発信がより求められていると理解している。アウトカムとしては、残課題はあるものの全体的にルーブリックの各項目のLvが大きく上昇した。また波及効果として、個別団体の成長のみならず、切磋琢磨し合うコミュニティが生まれ自走し始めている。
- 各団体の尽力もあり、一定以上、多様な形で実行団体によるアウトプットが生まれた。定量的には、10代自身から地域の関係者までの重層的な主体により、10代のための活動が多数展開されている。10代の受益者は5,000人超(ユニーク数)に及び、把握しているだけでも300人を超える人材が10代と関わり、300回を超える地域の関係者との協働事例が生まれた。定性的には、定量的な数字としてひとまとめには表し切れない多様な担い手・モデルによる多様な活動が展開された。10代に対する働きかけのみならず、10代を取り巻く環境・地域へのアプローチにおいても各団体の価値観や工夫に溢れた実践例が生まれた。
- 各実行団体が個別に設定したアウトカムはアウトプットと同じく多様で、全く同一のアウトカムやKPIは1つとして見られなかった。10代の変化ではなく、地域の変化に焦点を当てた団体も見られた。また、事後評価期に実施した資金分配団体と実行団体による合同調査によって、スタッフ向けのヒアリングから26種類の子どもの成長実感の項目が浮かび上がり、利用者向けのアンケートの結果、全ての団体でそれらの成果が生じていることが確認された。
- 総括・提言として、「0→1・ミクロ」については、経済合理性の外かつ、社会課題としての認知度が低い領域で、事業立ち上げ期かつ、資源が限られる地域での活動という、4重の壁を破る上で、想いとポテンシャルのある起業家が良い現場づくりに集中できる時間と資金を得られた価値は絶大であった。また、「ミクロ→メゾ」について、ミクロの良い現場が軸となり、人が育ち、関係者が広がり・繋がり、帳簿に表れない社会関係資本としての蓄積も生じた。これは、事業期間だけでなく、その先、地域や社会に残っていく人材や組織が生まれたことを意味している。そして、「メゾ→マクロ」については、3年間で各地で起きたミクロからメゾにわたる変化に鑑み、中長期的には地域全体や日本全体を変えていくことができると感じる。これからも各地の団体と協働して、ミクロ、メゾ、そしてマクロレベルでの変化を実現していきたい。

報告書全体の概要が、以下の項目により端的に記載されています

社会課題とそこへの事業の打ち手

事業で目指す変化

事業成果

実施状況

提言と知見教訓

(出所:「地方における10代の居場所づくり支援事業事後評価報告書」認定NPO法人カタリバ(2021年度採択事業))

# 「報告書要約」の事例 ～一般社団法人RCF～ (新たな災害における復興の担い手育成事業)

## 1. 報告書要約

被災地で行われる被災者支援や事業者支援において、十分な支援を受けられないまま、生活困窮の長期化や悪化、在宅被災者の発生、地域社会からの孤独孤立といった社会課題への発展が課題となっている。加えて、生活再建のノウハウをもって中長期的に被災地を伴走支援できる団体が地域内に存在しないことが多く、外部からの支援が完了した後の中長期的な地域に根付いた復興支援が途絶えることが多いことも課題視されている。

上記の課題に対し、弊団体では被災地域で活動する実行団体の支援を行うことで、行政による支援制度や様々な支援の枠組みから取り残され、被災による生活困窮が長期化する恐れのある被災者が継続的なコミュニケーションを通じて「受ける支援やその後の生活を自己決定」できる状態が被災地に生まれる状態を目標値とした。

そのため実行団体の事業において、支援対象者の規模や課題を把握し目標状態や活動内容を特定すること、支援における地域内外の連携体制を構築し、役割分担を明確化することが重要である。同時に、実行団体の事業における出口戦略の明確化や、再び生じうる災害において支援対象者のレジリエントな状態を言語化することで復興支援の持続性が担保されると想定した。

想定した状態をアウトプット目標とした実行団体の事業に対して資金分配団体として資金的支援・非資金的支援を行うだけでなく、課題である被災者の生活困窮の長期化の実態についての調査、支援に必要な機能の検討、食支援を通じた被災者支援の体制構築や行政連携支援を実施した。

支援活動により、静岡県伊豆山地域においては地域外の若手人材を呼び込み、地域の課題解決につながる事業の担い手になってもらうこととなり、宮崎県宮崎市においては本事業で育成したボランティアや仕組みが事業期間に発生した令和6年の宮崎豪雨災害において期待通りの活動につながり、青森県むつ市では被害をうけた水産業者を中心に被害の復興と、次の災害に備えたハード・ソフト両面の仕組み整備が進んだ。

こうした実践的な結果や成果が既に生まれていることから、本事業において想定した目標は達成し、その要因としては、各実行団体がステークホルダー毎のニーズ把握や関係性を広げ・深めることを資金分配団体の伴走支援をうけながら推進できたことで、課題解決に必要なプレイヤーを地域資源として巻き込めていったことが挙げられる。

学びは、資金分配団体の伴走支援の在り方として、地域資源としてのステークホルダーを実行団体と共にしっかりと棚卸しすることで、足りなければ外から連れてきたり新たに育成するなどの方法を取り、既につながっている関係であればそこを深めるためのアクションをすることが課題解決につながる事が明確になったことである。

報告書全体の概要が、以下の項目により端的に記載されています

社会課題

事業で目指す変化

事業戦略

事業の実施状況

事業成果と要因・課題

知見教訓

(出所：「新たな災害における復興の担い手育成事業事後評価報告書」一般社団法人RCF（2021年度採択事業）)

# 「インプット」の記載事例 ～沖縄認知症見守りコンソーシアム～ (認知症の方々も安心・安全な外出を担保できるまちづくり)

## 3-1.事業に使ったリソース [インプット]

### ヒト

**目標値**

- ・事業統括1名
- ・プログラムディレクター1名
- ・プログラムオフィサー2名 (みらいファンド沖縄、地域振興協会)
- ・経理1名、事業サポート2名、外部評価アドバイザー2名

### 実績値

- ・事業統括1名
- ・プログラムディレクター1名
- ・プログラムオフィサー2～3名(2023年度途中から2名)
- ・経理1名、事業サポート2名、外部評価アドバイザー2名

### お金

**目標値**

- ・休眠預金の助成金  
各実行団体 1500万～2000万円程度  
(1億4400万円。内、実行団体への充当額 1億円)

### 実績値

- ・休眠預金の助成金として、1億2,000万円程度活用した。(内、実行団体への助成額:約 8,500万円)  
※2025年2月末時点

### モノ

#### 目標値

- ・ミマモライドシステム(スタート時: 0件)として、親機、子機、タグなど(スタート時: 0件)

#### 実績値

- ・親機: 10機、子機: 165機、タグ: 25人に配布  
※詳細は白書 p5～p6参照

### その他

#### 目標値

- ・沖縄式地域円卓会議

#### 実績値

- ・沖縄式地域円卓会議: 伴走支援として、実行団体と 10回実施。事業評価円卓を3回実施
- ・ホワイトボードを活用した会議運営の支援も行った。

インプットの目標値と実績値が記載され、実態が簡潔に示されています

※資金計画は別添資料参照

# 「事後評価実施概要」の事例 ～一般社団法人全国食支援活動協力会～ (食の物流ネットワーク整備プロジェクト)

## 2. 事後評価 実施概要

### 2-1. 実施概要

事後評価で明らかにする重要なポイントとして設定した内容

#### ① どんな変化をこの事業の重要なポイントと設定し評価を実施したのか

- ・短期アウトカム01～03の達成状況の確認
  - ・中間アウトカム「企業・NPO・行政の連携によって地域が子ども達を地域で支えるための資源が循環するに」の発現に寄与しているかの確認
- ⇒アウトカムの評価結果を踏まえた考察+食支援のための広域物流ネットワークのモデルがどこまで構築できたかどうか

具体的な評価計画  
評価小項目（評価設問）、  
判断方法（指標）、判断基準、分析方法

#### ② どんな調査で測定したのか

##### ▼資金的支援短期アウトカム01「資源を循環させるためのロジ拠点（共同事業体）が作られ、有効に機能する」の評価

(1) 評価小項目	(2) 判断方法（指標など）	(3) 判断基準（目標値・状態）	(4) 分析方法・入手手段
実行団体（ロジ拠点）が、本事業の実施を通じて企業・行政・社協・団体とのネットワークが広がったか	事前評価で提出したエコマップから広がったり、関係が深化しているか	事前評価で提出したエコマップから広がったり、関係が深化しているか	実行団体のエコマップの事前と事後の変化

##### ▼資金的支援短期アウトカム02「支援地域に企業・行政から様々な人・モノ・カネが集まる」の評価

(1) 評価小項目	(2) 判断方法（指標など）	(3) 判断基準（目標値・状態）	(4) 分析方法・入手手段
支援地域に企業・行政から様々な人・モノ・カネが集まったか	ロジハブを通じて定期供給している食のある居場所の数	食材だけではない新しい物資の支援マッチング、対象受益者の広がり、生活支援サービス等新たな支援の事例が得られる。	実行団体のカウントから把握、活用事例についてはヒアリング

##### ▼資金的支援短期アウトカム03「ロジ拠点が集まった資源を分配できるようになる」の評価

(1) 評価小項目	(2) 判断方法（指標など）	(3) 判断基準（目標値・状態）	(4) 分析方法・入手手段
ロジ拠点が集まった物資を分配できるようになる。	支援地域で提供された食品量（t） 支援対象地域の食糧ロジハブ拠点の充足度	支援地域において年間合計200t程度の食品提供が出来ている状態 配送ポイントが事業開始時よりも増えている状態	食品量の年間推移 食品配送体制図の変化

(出所：「食の物流ネットワーク整備プロジェクト事後評価報告書」一般社団法人全国食支援活動協力会（2020年度採択事業）)

# 「事後評価実施概要」の事例 ～一般社団法人グラミン日本（1）～ （シングルマザーのデジタル就労支援）

## 5. 事後評価実施概要

### (1)実施概要

#### ①評価の目的

本評価は、「事業成果の測定」および「事業の価値の判断」を通じて学びを抽出することを目的として実施した。本評価では、実行団体が開催したプログラムに参加したシングルマザーの 経済的自立(収入の向上額、雇用形態の変化)、社会的・精神的自立(自己肯定感の向上、孤独感の解消等)、および ウェルビーイングの変化 に焦点を当て、全実行団体の参加者を対象に グラミン日本統一アンケート調査(以下、統一アンケート)を実施した。

さらに、非資金的支援による 実行団体の組織基盤の変化、実行団体の出口戦略の変化、および 実行団体と連携する企業・団体等の環境の変化 についても評価を行った。これらの変化は、実行団体から提出された 出口戦略シート および ヒアリング調査 をもとに把握した。

また、実行団体の事後評価がグラミン日本に報告された後、2025年3月3日に外部評価委員、実行団体の事業責任者、資金分配団体が参加する事後評価委員会を開催し、事業から得られた知見をもとにディスカッションを実施した。

#### ②評価の結果の活用

評価結果は、組織内で共有し、資金分配団体が今後実施していくシングルマザーのデジタル就労支援プログラム、及び、シングルマザーの就労支援をおこなう団体を支援するプログラムの改善に活用する。また、一般向けに編集しなおした報告書を発行し、Webサイトに一部をアーカイブすることで、今後のシングルマザーの就労支援のあり方を考える一助となり、企業等がインパクト雇用&ソーシングを検討する取り組みが広く普及することを目指す。

事業においてどのような変化を重要なポイントとして評価を実施するのかをまとめられています

評価の活用方法

### (2)実施時期

年月	資金分配団体
2024年7月	実行団体向けに事後評価に関するワークショップを開催 (講師:評価アドバイザー 小林)
8月	実行団体に組織基盤構築計画シート・出口戦略用作業シートの再提出を提案
10~12月	①グラミン企業開拓担当者及び実行団体からのヒアリング ②グラミン日本統一アンケートを実施
2025年1月末	実行団体の事後評価報告書(第1稿)の提出
2月	実行団体へのフィードバック、実行団体事後評価報告書の最終版提出
3月	事後評価委員会の開催
3月末	事後評価報告書の提出

実施時期

### (3)実施体制

内部/外部	評価担当役割	氏名	団体役職
内部	評価担当者	高橋 歌織	グラミン日本 プログラムオフィサー
内部	評価担当者	前川 典子	グラミン日本 プログラムオフィサー
外部	評価アドバイザー	小林 立明	多摩大学サステナビリティ経営研究所 教授・主任研究員
外部	評価委員	白河 桃子	相模女子大学大学院 特任教授
外部	評価委員	児玉 都	日本アイ・ビー・エム株式会社 コンサルティング事業部 HR&タレントトランスフォーメーション パートナー

実施体制

# 「事後評価実施概要」の事例 ～一般社団法人グラミン日本（2）～ （シングルマザーのデジタル就労支援）

評価項目と測定方法			
短期アウトカムA「就労・転職・起業・副業等を通じた、生活困窮リスクを抱えるシングルマザーの経済的自立」の評価		調査対象者	分析方法
<b>■調査方法</b> アンケート調査とヒアリング （主要項目） <講座終了後6か月時点の参加者の状況> ・収入の向上額 ・収入の向上を得た就労形態（待遇変化、時給UP、副業等） <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 2px; display: inline-block; margin-top: 10px;">調査方法</div>	<b>■調査実施時期</b> 2024年10月～2024年12月 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 2px; display: inline-block; margin-top: 10px;">調査実施時期</div>	<b>■調査対象者</b> ・実行団体のプログラムに参加したシングルマザー （データの回収方法は実行団体と相談の上実施）	<b>■分析方法</b> プログラム参加前と講座終了後6か月時点と比較して収入の向上と就労形態の改善を中心に経済的自立度を分析する
短期アウトカムB「経済状況の改善を通じた、生活困窮リスクを抱えるシングルマザーの社会的・精神的自立」の評価			
<b>■調査方法</b> 上記アンケートと同期に実施 ・自己肯定感の向上 ・孤立感の解消 ・経済的・社会的・精神的にリスクと感じる状況の変化 ・子どもとの関係の変化	<b>■調査実施時期</b> 上記アンケートと同期に実施	<b>■調査対象者</b> 上記アンケートと同様	<b>■分析方法</b> プログラム参加前と講座終了後6か月時点と比較して自己肯定感の向上や孤立感の解消、子どもとの関係を中心に社会的・精神的な自立度を分析する

©2022 Grameen Nippon All Rights Reserved. 6

（出所：「シングルマザーのデジタル就労支援事業事後評価報告書」一般社団法人グラミン日本（2021年度採択事業））

# 「調査方法概要」の事例 ～認定NPO法人カタリバ（1）～ （地方における10代の居場所づくり支援事業）

## 合同調査の概要

### 目的

10代の居場所を利用する子どもに結果的に生じる変化を洗い出す

### 手法

#### STEP① 項目の仮説を得る

実行団体やカタリバの拠点で活動するスタッフへグループインタビューを実施し、各YCで結果的(≠意図的)に起きた子どもの変化についての仮説を得る

##### ■インタビューの対象者

- 実行団体およびカタリバ運営のユースセンターのスタッフ（各団体1～2名） ※計23名に実施した

##### ■インタビュー形式

- 2～3団体/回。他団体の回答を受けて、起きた変化が想起されたり自団体の独自性に気づけたりするようグループインタビューを実施
- 所要時間：90分程度
- 「ユースセンターで一番印象に残っている子どもの変化」を問い、その変化が起きた変化などを深掘り

- ・ 上記を基に、変化の項目を洗い出す

#### STEP② 利用者アンケートを通じて仮説を検証する

STEP①で得た各項目仮説について、変化を実感した子どもが実際にどれだけいるのかを、10代の利用者を対象としたアンケートを実施して確認する

##### ■アンケートの対象者

- 実行団体が運営するユースセンターおよびカタリバ直営のユースセンターを利用する10代の利用者

##### ■1団体あたりの回答数

- 1団体10名（※集計の際に偏りが出ないように、各団体の回答数に目安を設けた）

##### ■回答形式

- Google フォーム  
※施設名をアンケート内で言及するが、団体によって施設名が異なるため、各団体ごとのフォームを個別にカタリバが作成

##### ■設問の構成（回答所要時間 10分程度） ※匿名回答

- 利用者の基礎情報（自由記述）：3問
- 変化に関わる項目（選択式）：26問  
※回答形式：5件法（「1.あてはまらない」⇔「5.あてはまる」）
- ユースセンターに対する印象（任意回答・自由記述）：1問

##### ■分析方法

- 集計した結果、全体平均が3.0より大きい変化項目は、「どのYCでも起こり得る変化」とした

##### ■実際に集まった回答数

- 202件（有効回答件数：201件）
- うち実行団体の有効回答件数：143件

調査方法の概要（対象者数や実施方法、分析方法、回収率等）を記載することで、読み手が調査の全体像を把握できます

# 「調査概要」の事例 ～認定NPO法人カタリバ（2）～ （地方における10代の居場所づくり支援事業）

## 合同調査で利用者向けに作成したアンケート（Google formで作成）

p.1

（※アンケートサンプル）【拠点名】利用者のみなさんへ

※こちらは、あくまでサンプルになります。本フォームにて回答収集したいようご注意ください。

これから、あなたの自費の心づかい、【拠点名】に実施の取り組みをとお知らせいたします。

質問の意味がわからないときは、

【拠点名】のスタッフや他の人にご質問ください。調べたい内容は、こちらに書くものを記入してください。お返事がありません。

【拠点名】とNPO法人カタリバの役割はそれぞれにお知らせいたします。

このアンケートは、【拠点名】をよりよくするために、また、【拠点名】を支援しているNPO法人カタリバの活動のために活用します。

注意事項

- このアンケートに回答するかは自由です。匿名からといって、不利なことはありません。
- 正しい答えはありません。思ったとおりにお答えください。
- あなたの答えが他の人に知られることはありません。あなたのどの回答も共有されることはありません。
- 匿名で入力する場合は、必ずしもお答えください。
- このアンケートにかかる時間は、10分～15分程度です。人によって異なる場合があります。

必須が記載です

【基本情報】  
あなたの【拠点名】の利用状況（「よろしく」よろしく）についてお答えください。

p.2

(1) あなたの学年を選んでください\*

小学5年生  
 小学6年生  
 中学1年生  
 中学2年生  
 中学3年生  
 高校1年生（相当）  
 高校2年生（相当）  
 高校3年生（相当）

(2) あなたは、1か月に何回ぐらい【拠点名】を利用していますか。平均的回数を、半角数字で教えてください。

回答を入力

(3) あなたが【拠点名】を利用し始めてから何が役立ちますか。半角数字で\* 教えてください。

数字のみご記入ください。例えば、1年3か月の場合は「13」とお答えください。

回答を入力

p.3

【拠点名】に来てからの変化（へんか）  
あなたが【拠点名】を利用するようになる前と現在を比べて、【拠点名】からの影響（いきよう）で次のような変化があったと感じますか？あなたの印象（いんしょう）に一番近いものを1つだけ選んでください。

1: 変化は少ない  
2: あまり変化は少ない  
3: どちらともいえない  
4: やや変化は多い  
5: 変化は多い

① 以前より、自分の気持ち（したいことや嫌なこと）を伝えてもらいやすくなった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

② 以前より、初めて知ったことや、興味（きょうみ）をもったこと、好きになったことなどが多かった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

③ 以前より、さまざまな活動に参加したいと思うようになった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

p.4

④ 以前より、自分の興味ややりたいことがはっきりした\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

⑤ 以前より、自分や周りの人と関わりやすくなった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

⑥ 以前より、これまで知らなかった、知ることがなかった人と会った\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

⑦ 以前より、家族以外の大人と会話するようになった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

⑧ 以前より、自分の将来（しゅら）について、はっきり目標（ちきり）を定めたようになった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

p.5

⑨ 以前より、目標している人やあこがれている人が増えた\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

⑩ 以前より、自分の住んでいる地域（まち）や社会についてよく知るようになった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

⑪ 以前より、地域の人の話がわかりやすくなった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

⑫ 以前より、自分が住んでいる地域（まち）で活動できるようになった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

⑬ 以前より、人と関わりやすくなった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

p.6

質問（せつもん）は残り半分で、あなたが【拠点名】を利用するようになる前と現在（げんざい）を比べて、あなたの印象（いんしょう）に一番近いものを1つだけ選んでください。

5: 変化は多い  
4: やや変化は多い  
3: どちらともいえない  
2: あまり変化は少ない  
1: 変化は少ない

⑭ 以前より、自分が困っていることを相談（さうだん）しやすくなった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

⑮ 以前より、もっと深く学んでみたいことが増えた\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

⑯ 以前より、気持ち（きんじょう）を伝えるために自ら行動（こうどう）を起こすようになった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

p.7

⑰ 以前より、自分も【拠点名】のよき影響（いんしょう）を受けたようになった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

⑱ 以前より、将来（しゅら）について考えるようになった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

⑲ 以前より、自分が住んでいる地域（まち）で活動するようになった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

⑳ 以前より、地域（まち）や社会（しゃかい）をよくするために行動（こうどう）するようになった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

㉑ 以前より、チームで活動する力を身につけた\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

p.8

㉒ 以前より、自分のことを大切に思うようになった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

㉓ 以前より、自分のことが好きだと感じるようになった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

㉔ 以前より、自分に関することについて、意見や気持ちを聞いてもらえるようになった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

㉕ 以前より、住んでいる地域で自分の意見が反映（はんえい）されるようになった\*

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

p.9

㉖ 以前より、【拠点名】以外の場でも活動（かどう）することが増えた（例：学校（がっこう）やアルバイト、趣味（しゅみ）やボランティア活動（ボランティア）など）

1 2 3 4 5  
変化は少ない ○ ○ ○ ○ ○ 変化は多い

あなたにとって【拠点名】はどのような場所（ばしょ）ですか？単語（たんご）でも文章（ぶんしょう）でも構いませんので、おもしろいところを教えてください。

回答を入力

フォームをクリア

添付などに調査票やヒアリング項目をつけることで、ワーディングや設問の並べ方、選択肢の設定方法を知ることができ、調査結果を確認する際の参考となります

（出所：「地方における10代の居場所づくり支援事業事後評価報告書」認定NPO法人カタリバ（2021年度採択事業））

# 「成功要因・課題」の記載事例 ～特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム～ (災害時食支援ラストワンマイルへの到達事業)



## 7. 成功要因・課題

	社会課題解決に貢献したアウトカム	達成が困難であったアウトカム
アウトカム	アウトカム 1 (資金支援): 食料供給: 被災者 (特に災害弱者) が食料にアクセスでき、食料・食事を提供されることで、安心感を得られている	アウトカム 3 (非資金的支援): 被災地内部における行政や企業、民間支援団体との連携に必要な関係性が構築され、活動内容や成果等の情報が十分共有されている
要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>一番の成功要因は、3年間の平時プログラムを通じて築いたネットワークを、災害発生時に迅速に活用できた点である(2HJの炊き出しの事例)。事前のネットワーク構築により、現地への支援が迅速に行われた。</li> <li>資金面において、発災前に事前準備ができていたため、発災直後からの緊急対応期においては、速やかな助成による現地支援が可能となった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>事前評価の段階で事業設計に課題があり、行政や企業との持続的かつ深い連携構築に向けた具体的な計画が十分ではなかった。</li> <li>また、1年間という限られた事業期間に対して設定された目標はやや高めであったといえる。今回は大規模な地震と豪雨による複合災害であり、被災地内に連携できる企業が少ない状況であったことも背景にある。また、実行団体自身の取組により、行政や社会福祉協議会との一定の連携は進めることができたといえる。</li> </ul>
学び・課題	平時から地域との関係性を構築しておくことがいかに重要であるかを	限られた事業期間と被災状況を踏まえ、どこを目標値とするのが

	<p>感することとなった。本事業の事例ではないが、事前に連携がない、または協働した事業がなかった地域では、事業が当初の予定通りに進まず、調整や再調査が必要となる場面があった。このため、時間や追加のコストが発生することがあった。</p> <p>これらのことから、平時の取り組みが実際の災害対応において非常に効果的であることが証明され、今後の事業運営においても重要な教訓となった。</p>	<p>適切かを慎重に検討する必要がある。</p> <p>・JPFの中間支援団体としての強みやネットワーク資源を、実行団体にどのように提供すれば効果的か、また活動の負担とならないかを議論し、実行団体からのフィードバックをもとに伴走支援の在り方を模索することが重要である。</p>
--	--	--

社会課題解決に貢献したアウトカムと、達成が困難であったアウトカムについて、「要因」として現場で起きたことを具体的に記載し、さらに「学び・課題」として他事業に転用可能な抽象度に引き上げて記載しています

(出所: 「災害時食支援ラストワンマイルへの到達事業事後評価報告書」 特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム (2021年度採択事業))

## 9-2 自己評価の判断根拠について

### (1) 課題やニーズ把握の適切性の判断

- ・ 本事業では資金分配団体は、3実行団体に対して泉北ニュータウンのあらゆる階層での孤立化の解消をめざして地域課題やニーズの把握ができるよう伴走支援した。

#### ① NPO 法人福祉ワーカーズほーぷ

- ・ 事業構想段階で想定した受益者数は竹城台地区地域住民 13,400 人のうち、高齢で心身の衰えがある状況や子育て、介護など日常的にケアを必要としている、または、なんらかの障がいを持っている人2,010人であった。結果的には、ほーぷカフェの利用者は5,407人に上った。

#### ② NPO 法人志塾フリースクールラシーナ

- ・ 事業構想段階で想定した受益者数は城山台地域住民 6,310 人に対して、不登校の状態となっている小学1年生～高校3年生の児童生徒、家庭や地域に居場所がない子ども 20 人としていた。
- ・ 結果的には、泉北ベースでは子ども向けフリースペースが延べ 32,000 人、駄菓子屋カフェが 25,435 人の利用があり、フリースクール利用生徒数登録者の累計は 20 名に上り、合計 57,455 の利用となった。

#### ③ NPO 法人団地ライフラボ at 茶山台は、想定される受益者数

- ・ 事業構想段階で想定した受益者数は、公社茶山台団地住民及びその周辺の住民 4,389 人の中で、18歳未満の住民がいる核家族世帯 363 世帯(全世帯の 16.5%)または独居状態にある高齢者世帯 398 世帯、合計 761 世帯(16.97%)としていた。結果的には、団地ライフラボでは、茶山台保健室の運営を通じて、団地内外住民延べ 1,376 人、住民カルテ 150 名にサービスを提供するとともに、子ども食堂、中学生の居場所チャベリ場を通じた延べ人数は 2,416 人となった。

#### ④ 総括

資金分配団体の伴走支援を通じて、3実行団体とも、構想段階での対象者が大幅に増加、拡大できており、泉北ニュータウンの社会的孤立者への効果的な支援による孤立化の解消をめざした課題やニーズを適正に把握できたことから、伴走支援は有効、かつ適切であったと判断できる。

判断根拠として、実行団体ごとに課題やニーズの想定と実績を振り返り、資金分配団体としての総括（自己評価）を記載しています

# 「結論・自己評価の判断根拠」の記載事例 ～公益財団法人泉北のまちと暮らしを考える財団（2）～（泉北ニュータウンの孤立と地域をつなぐ）

## (3) 実施状況の適切性

ここでは、資金分配団体の伴走支援を受けて、3実行団体が、実行会議の構築と実行、資金循環の仕組み、居場所の確保に対して、事業継続に係る組織強化が達成されたかといった観点から、伴走支援の有効性と適切性を判断した。

### ① NPO 法人福祉ワーカーズほーぷ

#### (ア) 実行会議の構築

- ・ ほーぷカフェ関係者を中心に、社会福祉協議会南区事務所のコミュニティソーシャルワーカー、第3地域包括センター、介護センターこもれび等が実行会議に参画し、実行体制が確立されるとともに、初動期には高齢者を中心とした課題に限定されたものの、事業後半には深刻なケースを専門機関が連携して支援を実施するケースが生まれた。

#### (イ) 資金循環の仕組み

- ・ 2022年度の事業収入¥61,592,301 に対し、2024年度は¥70,025,974 に増加した。

#### (ウ) 活動の拠点となる居場所の確保

- ・ 事業収入が得られるカフェやシェアキッチン等の運営、誰でも気軽に立ち寄り、相談に乗ったり、会議や交流ができるコーナー・スペース、地域の多様な団体の活動拠点ともなるレンタルルームが実現し、活動の拠点となる居場所が確立された。

### ② NPO 法人志塾フリースクールラシーナ

#### (ア) 実行会議の構築

- ・ 実行会議の主要なメンバーは、泉北 BASE スタッフに加え、放課後デイサービスぽっ歩、堺市南区役所子育て支援課、堺市社会福祉協議会南区事務所コミュニティソーシャルワーカー、堺市子ども家庭課 子どもの未来応援担当、美木多中学校生徒指導教員、城山台民生委員、堺市市長公室政策企画部、主任児童委員、堺市南第一地域包括支援センターと、子供関連部局を中心に、暮らしに係る多様なメンバーが参画しており、実行会議が構築され、有効に機能している。また、他区の子育て支援課や他市の子育て支援課が視察に来ている点も特徴的であった。

#### (イ) 資金循環の仕組み

- ・ 組織の基盤強化のため複数の事業助成金を受領している収入構造としては 2022 年度 33,247,824 円の事業費に対して助成額 4,115,432 円だった。一方で、2024 年度の事業収入 58,194,208 円に対して、助成金収入は 11,280,581 円と助成金比率が高まっているが、本事業を通じて事業所が1箇所増設され、事業収入も 17,761,262 円と増加していることから基盤強化を実現できた判断できる。

#### (ウ) 活動の拠点となる居場所の確保

- ・ 事業収入が得られるカフェやシェアキッチン、誰でも気軽に立ち寄り、相談に乗ったり、会議や交流ができるコーナー・スペース、地域の多様な団体の活動拠点ともなるレンタルルームが確保され、活動の拠点となる居場所が確保できた

### ③ NPO 法人団地ライフラボ at 茶山台

#### (ア) 実行会議の構築

- ・ 実行会議の構成メンバーは、初動期は団地ライフラボ理事、コミュニティナース、南第3地域包括センター、堺市社会福祉協議会南区事務所コミュニティソーシャルワーカー、保健センター保健師といった専門機関の職員が中心で、対象人数も限定的であったが、事業後半には深刻なケースを専門機関が連携して支援するケースも生まれ、実行会議が有効に構築されたと判断できる。

#### (イ) 資金循環の仕組み

- ・ 2022年度の年間事業規模は、4,471,406 円に対し 4,115,432 円を助成金に頼る構造であった。2024年度では年間事業規模 7,025,974 円に対して、寄付額が 300 万円と収入の42.7%まで拡大し、事業収入も 28%を占めるようになり、収入構造が多様化しており、資金循環の仕組みが確立されつつあると判断できる。

#### (ウ) 活動の拠点となる居場所の確保

- ④ まちかど保健室を活用して、子ども食堂や中学生の居場所、移動支援の実施など、対象者の相談や交流ができたことに留まらず、課題解決のための意見交換や会議が開催できるコーナーやスペースを設けることができ、活動の拠点となる居場所の確保できたと判断できる。

### ⑤ 総括

以上のように、資金分配団体の伴走支援を受けて、3実行団体とも、①実行会議の構築とともに組織強化につながったこと、②資金循環の仕組みの構築、③活動の拠点となる居場所の確保が達成されており、3実行団体の実施状況は適切であったことから、資金分配団体の伴走支援は有効かつ適切であったと判断する

実施状況の適切性についての判断を、資金分配団体として重視した項目ごとに、各実行団体について考察し、総括を記載しています

# 「結論・自己評価の判断根拠」の記載事例 ～公益財団法人パブリックリソース財団～ (子どもシェルター新設事業)

## 7-2. 自己評価の判断根拠について

包括的支援プログラム社会的インパクト評価の構成要素別自己評価の判断根拠については、まず(1)課題やニーズの適切性および(2)事業設計の整合性においては、子どもが個人として尊重され、子どもの最善の利益を保障し、子どもの意見代理人を担う弁護士が法人運営の中核を担い、さらに子どもの秘匿性を備えた緊急保護施設である子どもシェルターを必要とする10代後半の子どもはどの地域においても存在すると言えることから、想定した水準にあると評価した。判断根拠の詳細については、「6-3. 事業計画の妥当性 (P.55～P.57)」参照をいただきたい。

(3)実施状況の適切性については、本報告書の「5. 包括的支援プログラムの実績 (P.12～P.28)」を判断根拠とした。まず、「5-1. インプット (P.12)」に示した通り、経費や自己予算は計画金額の範囲内で適切に使用されたと考える。実行団体への助成額においては計画と実績において差が生じているが、主な要因としては、①実行団体数が計画よりも1団体少なかったこと、②シェキラリの途中辞退が主な要因である(「6-7. 事業の効率性 (P.65)」、添付資料も参照)。次に、本事業における活動とアウトプットの実績について

は「5-2. 活動とアウトプットの実績(資金的支援) (P.13～P.22)」に示した通り、全体的に十分な実績で実施した。以上のことより、本事業の実施状況の適切性については想定した水準にあると評価した。

(4)事業成果の達成度については、本報告書の「6. 事後評価結果 (P.29～P.65)」を判断根拠とした。「3-4. 事業設計図(ロジックモデル等)や事業概念図 (P.8)」で示した通り、本事業では4つのアウトカムを設定した。「6-1-1-1. 資金的支援のアウトカムの達成度合い (P.29～P.38)」および「6-1-2-1. 非資金的支援のアウトカムの達成度合い (P.39～P.46)」で示した通り、4つのアウトカムの達成度合いは高いと言える。また、特に非資金的支援の文脈においては「6-1-3. 想定していなかったアウトカム(波及効果) (P.47～P.48)」および「6-2. 新設子どもシェルターから得た学び (P.49～P.54)」にも言及した通り、事業設計時には想定していなかったアウトカムが発生した。これは資金分配団体および実行団体が、変化する外部環境や新しい法制度の整備について情報を収集し、柔軟に計画の変更と事業実施を行ったためであると考えられる。以上のことより、本事業の達成度については想定した水準にあると評価した。

66

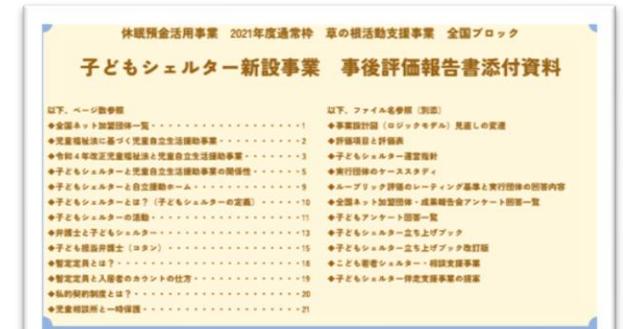
根拠となる内容を読み手が確認できるように、該当ページを記載しています

(出所:「子どもシェルター新設事業事後評価報告書」公益財団法人パブリックリソース財団(2021年度採択事業))



## ■公益財団法人パブリックリソース財団 (子どもシェルター新設事業)

- 何に重点を置いているか、ストーリー・メッセージが明確。
- 評価の判断軸や根拠となる資料、ケーススタディ、制度分野へのフィードバック資料等が添付されており、妥当性・客観性が担保されるとともに、制度分野へのフィードバック報告書となっている(報告書の半分が添付資料)



## ■認定NPO法人カタリバ

### (地方における10代の居場所づくり支援事業)

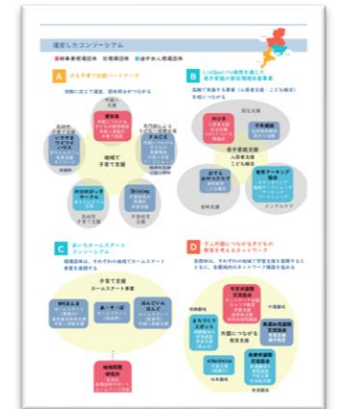
- レイアウトが工夫されており、読みやすい
- 様々な観点からループリックを活用して評価をすることで、実行団体の状態を丁寧にかつ立体的に評価している
- 知見教訓がミクロ・メゾ・マクロ向けに整理されており、理解しやすい



## ■一般財団法人中部圏地域創造ファンド

### (チームによる支援活動の広域展開)

- シンプルな構成で、読みやすい
- 資金分配団体の戦略が明確で、資金分配団体ならではの報告書
- 提言が、各団体へ丁寧な応援メッセージになっている
- 知見教訓が、他事業への学びになる形をとっており、示唆に富んでいる





## ■ 更生保護法人ウィズ広島（19年度採択事業） （退所者フォローアップ支援）

- 資金分配団体にて統一フォーマットを提供
- 達成・未達成を明確かつ要因が端的に記載
- 個別事例と定量的把握の両方から事業価値を上手く可視化
- アンケート詳細を添付し、透明性・信頼性を確保
- 全国数値と比較することで介入効果を評価

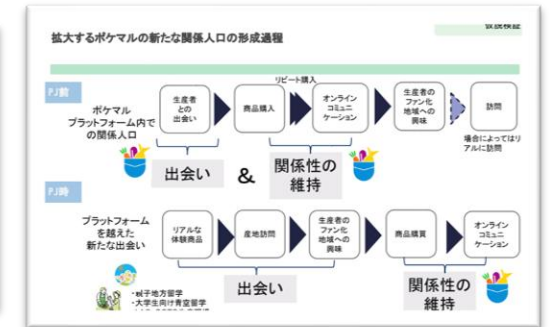
1. 事業概要	p.2	5. 考察	p.23
2. 事後評価実施概要	p.4	6. 結論	p.33
3. 事業の実績	p.7	7. 謝辞	p.34
4. アウトカムの分析	p.23		

2. 事後評価実施概要	
1. 実施概要	
2. どんな調査で実施したのか	
3. 調査結果	
4. 考察	

## ■ 株式会社 雨風太陽（19年度採択事業）

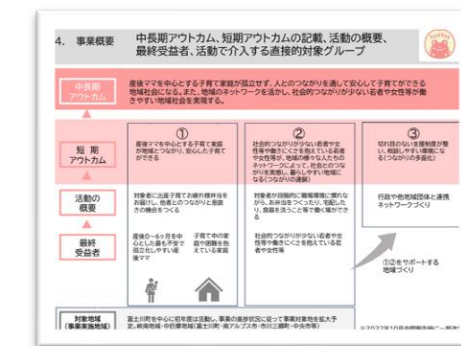
### （オンラインを主軸とした関係人口創出・深化プロセスの体系化・一般化事業）

- 読んでほしい層を明確に定め「成果報告書」をPPTで作成
- 仮説検証を中心に構成することでプロセスの価値を可視化
- 本制度で報告が求められる事項のうち、「成果報告書」に含めなかった点のみ別途文書を作成



## ■ 特定非営利活動法人スペースふう（20年度採択事業） （リユースお弁当箱がつなぐ地域デザイン事業）

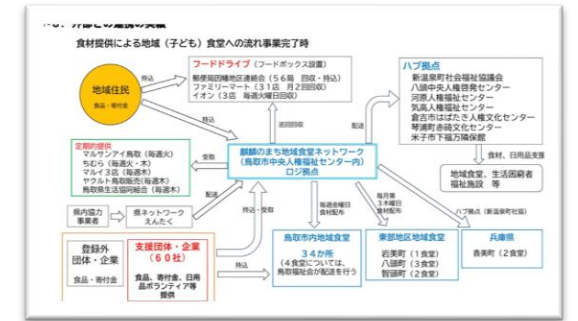
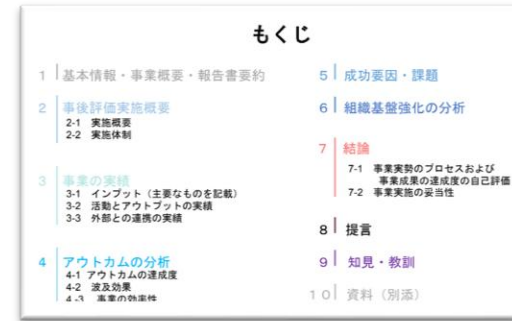
- 写真や絵、字の大きさなど工夫し、ポイントがつかみやすい
- アンケート結果等資料が充実し、判断根拠が分かりやすい
- 楽しそうな雰囲気が伝わってくる



## ■麒麟のまち地域食堂ネットワーク（20年度採択事業）

### （麒麟のまち地域食堂ネットワーク構築事業）

- 資金分配団体にて統一フォーマットを提供
- 連携協働・ネットワークに重点を置いた図解を複数用いることで、立体的に価値づけをし、連携協働を重視していることが伝わってくる



## ■NPO法人 札幌盲ろう者福祉協会（21年度採択事業）

### （盲ろう者の地域団体の創業支援事業）

- 団体の沿革や取り組みがわかりやすい
- 事業で作ったパンフレットを二次活用
- 人員をどんな業務に何人投入したか、といった詳細な情報まで入れている
- 高額機器購入に関する成果報告・活用状況が伝わる
- 添付資料が充実しており判断根拠がたどりやすい
- 細かいレポートだけでなく、最後にあたたかいメッセージも載せており気持ちも伝わる



視覚・聴覚障害者のコミュニケーション方法の進化

① 支援者と支援者間のコミュニケーション方法（2023年1月～2025年3月）

・メインに主に活用するコミュニケーション方法（複数回答あり）

	音声	視覚手段	触手話	筆談	点字	顔文字	絵文字	手書き	計
① 支援者	3	4	6	2	1	1	1	0	18
② 活動終了時	4	4	6	1	3	0	1	0	19
③ 継続（1-3）	-1			-1	+2	-1			+1

・サブに主に活用するコミュニケーション方法（複数回答あり）

	音声	視覚手段	触手話	筆談	点字	顔文字	絵文字	手書き	計
① 支援者	1	0	3	2	2	1	6	2	22
② 活動終了時	0	2	3	4	2	4	5	1	27
③ 継続（1-3）	-1	+2		+2		+3	-1	+1	+5

・各コミュニケーション方法の増加は、盲ろう者一人ひとりの障がい状況の変化と深く関係しており、単純な数値の増減だけで一概に評価することはできない。

・しかもその上で、企業としてメイン・サブともに活用可能な方法の増加していることは、盲ろう者自身が多様な手段を学び、習得している成果の一環として肯定的に捉えることができる。

・先に「学習したいコミュニケーション法」の調査結果を基に、本報に報れていると、当報は採用していた方法と一致する。これは、盲ろう者の学習意欲に加え、本事業による「学習支援」等の機会の提供と、その場における「対話支援」等のアウトプットと社会参加の促進による支援が結果的に作用したものであり、その結果として、盲ろう者が新たなコミュニケーション手段を獲得するという結果が期待される。

## ■株式会社コエルワ（21年度採択事業）

### （地方の子どもの選択格差を解消するモデルの構築）

- 図解を活用し、事業全体像が直感的に理解できる
- 目次構成と章立てが明確で、読みたい箇所にアクセスしやすい
- 持続化戦略や財源確保の具体策まで踏み込んで記載している

